

北方洋学思想史—南部盛岡と箱館—(2)

藤 原 暹

一、洋学系紀行者の見た北方

前回に取り上げた林子平は北方問題には大いに意見を述べたが、それは北方中心主義に立ったものではなかった。林子平が『三国通覧図説』(天明五・1785)で「本邦ヲ中ニシテ朝鮮、琉球、蝦夷及び小笠原」の形勢を論じた事は有名である。本邦(州)の「隣境」に目を向けたことは注目に値するが、それは彼自らが記しているように先学の文献上の知識に基付いていた。⁽¹⁾この点から蝦夷地に子平は行かなかったのではないかという疑問が同時代人からも起っていた。(後に大正年間になって子平の友人であった工藤球卿の『赤蝦夷風説考』の記述を受けたのではないかという説⁽²⁾も出てきて一気にそれは高まった。)

同時代人としては地理学者であった古川古松軒が子平の蝦夷地理に関する記述に疑問を抱いていた。古松軒は天明八年五月幕府の奥羽巡見使に同行して奥羽から蝦夷地に渡って実見した。江戸を出発するにあたって彼は『三国通覧図説』と彼の師長久保赤水の『東奥紀行』を携え旅行中自ら行った観察とこれらの書の記述を一つ一つ照合してその誤りを紀行文『東遊雑記』に記した。特に子平に対しては痛烈な批判を浴びせた。

「林子平蝦夷全図を見るに其違ひ大なり」とか「是等甚だしき虚説なり」という指摘を超えて、次のような激的な言葉も出てくる。

自国なる南部津軽の地図も鼻の有所へ目を付しやふの図をなし、…是等こそ林子平が面前にある事にして委しく知るべきことなるに、夫をも知らずして遠き北方の国々迄委しく知り顔に板本になせる人なれば論ずることにはあらざれども、あまりなる虚説故愛に載せるもの也。かかる人のあるというも奥州大国の故なるべし⁽³⁾

こうした虚実をあばいた彼はついに「林子平が氣遣におもふムスコビア蝦夷地に志し有とも松前侯の武備あるを見ては思ひも寄らぬ事也」と子平の危機感までも否定する。もっとも『東遊雑記』の写本の書写者たちは古松軒の子平批判を必ずしも肯定してはおらず逆に古松軒を批判する按文をも記している(『日本庶民史料集成』本537頁)。ところで、古松軒は奥州から蝦夷地への旅の前、天明三年九州の旅を行い紀行文『西遊雑記』を著した。当然鎖国下唯一の西洋文化との接触地域長崎についての記述が出てくるし、オランダへの関心もあったはずなのである。

矢守一彦氏は古松軒の『東遊雑記』と彼の師長久保赤水の『長崎行役日記』とを比較されて、

-
- (1) 「本邦ノ図」は長久保赤水の地図、朝鮮図は「朝鮮大象胷ノ伝ルモノ」、琉球の図は「中山伝信録アリ」、これに「白石先生ノ蝦夷志及び淘金家ノ著セル北海随筆等ヲ以テ」作成したという。
 - (2) 大友喜作氏『北門叢書』の解題で「何等かれ(子平)自身蝦夷地から得て来た様なものはない」と述べ、それは工藤球卿の『赤蝦夷風説考』の「後塵を拝するもの」とした。
 - (3) 古松軒の子平批判については板垣耀子氏の「古松軒の林子平批判」(『近世文芸』31)近世文学会、昭和54)があり、批判箇所引用文の諸本対比が行われているが、そこでは主として近世紀行文学史上の特色の指摘に中心がおかれている。

前者はよりオランダ文化の方に引かれたあとがうかがわれ、後者にはより中国文化へ心を寄せる傾向があるとしている。⁽⁴⁾たしかに、地理学者としての両者を比較した場合にはこうした傾向はうかがえよう。しかし同じオランダ文化に憧れ長崎紀行を行ない、その見聞観察を著した司馬江漢の『西遊日記』をみると、オランダ文化自体の側に入り込んで見るという理解があつてかなり古松軒とは異なっているようである。(勿論子平と江漢では西洋に入り込む方向性は異なっている。江漢はロシア使節ラクスマンの交易要求に対しても友好的であり、外部侵略への危機感は薄かった。)古松軒はあくまでも自然地理的な条件を観察する態度であつて、自らの危機意識に従つて対外的状況に入り込むという姿勢はなかつた。

例えば、『東遊雑記』の最も原形に近いとされている南葵本⁽⁵⁾にもオランダの記事が出てくる。南部領に入った時の記事がある。

日本の大(人カ)の紅毛の事を聞きては言語も解せず食事も仲々鼻向けならぬやうに物語などもする事成るに日本の内にかかる辺鄙のある所を知らぬ奥州の広大成るを察すべし。此の四五日の道中はジャガタラ嶋へ流舟せしここちせし事共也。

ここでは、紅毛(オランダ)の言語や食事への注目がジャガタラと連関されて受け取られ、それとの比較で日本の内にも理解に苦しむ北方の辺鄙性がある事への指摘である。しかし、それ以上の批評性は見られない。かかる意味で対外的な危機感の顕著な現れとして東北を旅したのは吉田松陰の場合であつたと考えられる。

吉田松陰は嘉永四年十二月東北の旅に出るが、それに先立って嘉永三年八月から十二月には鎮西遊歴の旅を行い平戸長崎を訪問した。平戸では兵学者葉山左内、豊島権平他から多くの書籍を借り読破した。その中には『近時海国必読書』があつた。これは十冊からなる西洋学の翻訳や諸家の海防論策であつた。松陰はこれを読破し必要な箇所を抜き書きをした。さらに興味深いのは初めこの方面の書は『近時海国必読書』に尽きるのではないかと思つていたが、それ以外に七冊の新しい経政論書を見せられこれをも読破し批評を書き留めた事である⁽⁶⁾この中には羽倉用九の「海防私策」、鶴峰戊申の「内密問答書」、会沢正志斎の「新論」などが含まれていた。松陰の心にいっきに対外的な危機意識が植え付けられていった事が考えられるのである。鶴峰の「内密問答書」の記事には批判的(後述)であつたが、会沢の「新論」には心奪われるものがあつた事は確かである。これはやがて彼の東北の旅で水戸を訪問する前提を成すものでもあつた。

平戸に続いての長崎は往路帰路合わせて約三週間の滞在が行われ、この間蘭館唐館の縦覧からオランダ船への試乗見学もしている。東北の旅の後にロシア船で海外渡航を試みようとして長崎を訪れるのもここに一つの伏線がある。松陰が長崎に到着した時には既にロシア船は出港して失敗に終わる。(再度、来航したペリー艦隊に乗船を試みこれまた失敗するのはこの直後である。)このような諸前提をもって、東北の旅は実行される。この旅が松陰をして「陸の兵学者から海の兵学者」たらしめたという指摘⁽⁷⁾があるが、それは妥当な見解と言えよう。この旅で佐渡春日岬の砲台を見学し、北上して弘前における北辺警備の実情を調査している。特に弘前では次のように述べている。

三月朔日 伊東広之進を訪ふ。…伊東云はく「津軽の海岸は五十里、砲台九所、大間越・金

(4) 『古地図への旅』朝日新聞社 1992 68頁。

(5) 東京大学所蔵。

(6) 『吉田松陰』日本思想体系 54 岩波書店 1978 418頁。

(7) 前野喜代治著『素顔の吉田松陰』成文堂 昭和 58 31頁。

井沢・小泊・竜飛・三馬屋・平館・大浜・青森・野内なり。三馬屋は原と一隊を成せしが、今は稍減じて僅か百人のみ平館は近ごろ戌を、設けし、三馬屋に比し更に少なし⁽⁸⁾

と警備の少なさを知る。また、青森では、「青森は一大港湾なり、宜しく軍艦数十隻を備へ以て非常に備うべし」と評している。馬門・野辺地から南部領に入るが、ここで「砲台」と「砲一門を備う」事を記した以外は述べていない。ここからはただちに南下しており、下北半島を北上して海岸線の警備や大畑・大間からの箱館への海上路などについては触れていない。弘前藩と比較して南部藩の北辺警備についての記事が少ない。この理由の一つは例えば弘前藩では伊東広之進を訪問して彼から情報を仕入れている。翌日は荒谷貞次郎を訪問している。伊東は佐藤一斎、篠崎小竹に学んだ藩学者であり、諸国をも遊歴した海防論者である。江戸で松陰は一斎門と関係していた。荒谷は江戸で山鹿流兵学塾を開いておる山鹿素水の弟である。言うまでもなく松陰は山鹿素水門とはかねてから深い関係にあった。伊東や荒谷に会う事は江戸出発に先立って予定されていた事と考えられる。南部藩の北辺警備について記事が少ないのは南部藩学と松陰との関係がやや異なっていた点にあるのではなかろうか。江戸出発に際して松陰は友人宮部鼎蔵と南部藩学江幡五郎の敵討ちに加担しようとした事が知られている。(五郎の敵討ちとは五郎の兄春庵が南部藩内の藩主擁立問題で非業の死を遂げた事に対する報復計画であるがここではそれには立ち入らない。)

南部盛岡で最初に訪問するのも春庵の母妻や忘れ形見文虎であり、春庵の仮葬所香殿寺であった。松陰が盛岡を訪問した時はかかる藩主交替をめぐる内紛の余波なお続いている折であった。松陰が南部藩の情報を仕入れようと訪ねた山田斎宮、瀬山命助は共に春庵事件に連座した人物であって謹慎中の身で松陰との面会をも断った。松陰の盛岡での二日間は対外的危機問題を語る以前の藩の内憂への感慨で終わったのである。

二、鶴峰戊申「内密問答書」

松陰の東北遊歴の前提に九州遊学中の対外的情報とそれへの対応策論があったと述べたが、その一例を戊申の『内密問答書』⁽⁹⁾で考えてみたい。鶴峰戊申その人については別に拙著⁽¹⁰⁾があるのでそれに譲りたい。彼が嘉永二年七月に筒井肥後守、林大学頭、阿部伊勢守、中沢左京に提出したのが海防論策『内密問答書』である。この史料が松陰の嘉永三年九月～十月にかけての平戸旅行までに平戸の豊島権平の手はどうして届いていたのかははっきりしないが、この時点でこれを読んだ松陰は「此ノ上下二篇トモニテノ外ナル事ヲ書キタル者也」と憤慨した。

戊申が『問答書』(以下略)を執筆して提出するにいたるのは、前年の嘉永元年四月には出羽飛鳥に、続いて越後粟島に異国船が来航したのを始めとして、翌二年二月には隠岐島に異国船が現れ、更に同閏四月には城ヶ島沖に英国軍艦(船将マセーチン)が上海から北上してきた。マセーチンはその後下田にも来航して測量をも行い、各所に上陸したりした。江川英龍は兵を率いて交渉し帰らせる事件も起こった。日本海側、太平洋側、対馬海峡、津軽海峡の全てが異国船の航行で占められるという事態になっていた事による。

『問答書』は二つの部分からなる。初めの部分は次の五点にわたって意見を述べている。「一、異国船と申す中にもエケレス船尤用心可致事」、「二、異国船の患難を除くに一計の事」、「三、敬神の道を専らに御立被為在度事」、「四、西洋軍船同様の官船御仕立被為在度事」、「五、武術

(8) 前掲 日本思想体系本 506 頁。

(9) 『海防史料叢書』所収 鹽田順庵『海防彙議補卷五』の「内密問答録」77 頁以下。

(10) 『鶴峰戊申の基礎的研究』桜風社 昭和 48。

訓練御手當の事」。

この五点の言うところは、イギリスが一番「天下勇猛の国」であって「属国頗多く…本国の人力を不費して数十ヶ国の兵を動かし、軍船を仕立て此方の邊海徘徊致させ」「交易通信」を求めてくるが、その態度は「仁義礼讓の正道」をもって接近する。これに対して「我神州」は「善隣国寶館」を長崎辺に建て友好を結ぶべきである。しかし、通信を進める間に「西洋の仏教自然に移り」くる心配があるが、「我神州」の「敬神の道」を立てるべきである。西洋の仏教はいわゆる「魔法妖術」の類ではなく「西洋の仏教も人々に親切に仁義行」わせるものであって矛盾しない。むしろ逆に「敬神の道」を天下（世界）に広める事にもなる。西洋の仏教を恐れるよりも西洋式の軍船をしつらえ武術を訓練すべきであるとする開国論である。後の部分は西洋との交通や西洋学受容の過程を更に細部にわたって求められたのに対して付け足したものである。鎖国体勢の内にも既に我が国はオランダとの通商を通して西洋の技術を学び翻訳学も起こして来た訳で今更異を唱えるべき事ではない。すでに我が国が迎ってきた道は「西洋各国の国を富まし兵を強からしむる」道と同じものであるし、このように外国の文物を受容し内を強化する事こそ「敬神の道」そのものの顕現といってもよいものであると述べる。従って享保年間にケイズルという西洋人を雇って西洋馬術を習得させた事などは得策であったと考えたのである。九州遊学の当初松陰はかかる戊申の考えを士道に悖るものと受け付けなかったのである。

（松陰をして西洋事情を熟知しなければこれからの士道の展開はあり得ないという意識的な転換を行わせるに至るのは江戸に出て来た後、新たに佐久間象山門に学ぶ段階からであった。）

戊申の開国論がペリー来航以前の早い時期のものであり、しかも西洋学を単に形而下に限らず形而上的側面（キリスト教）からも評価して西洋の富国強兵の背後にかかる形而上学が因している事を観た点で卓越したものであったとしたのは村岡典嗣氏⁽¹¹⁾であった。ここでは先述した戊申の「善隣国寶館」の提唱に注目したい。いわば万国との善隣友好の機関設営の提唱であって卓越した考えであった。ところで戊申はこれを長崎辺に予定している。必ずしも東北を含む東日本の地を射程距離に入れたものではなかった。彼はペリー来航後、嘉永七年三月に「新町開発存寄書」を出して、海岸の備え向きを西洋風に仕立てるべく新町を建設する事を提案している。その記述は村岡氏も指摘するように窮民の救済を含んだ社会政策的な見解であったが、それが北日本の開発と連関して新しく新開地の新町の建設構想とはなっていないかつ、善隣友好の場所を含むものではなかったという事に注意しておく必要がある。

嘉永期から安政期にかけての南部盛岡藩内の八角宗律を中心とする西洋医学の状況や箱館にペリー艦隊が入港した前後の南部藩関係者の摂取した西洋情報については既に別稿⁽¹²⁾で論述したのでここでは繰り返さない事にする。

三、那珂（江幡）五郎「上涌谷侯書」

江幡五郎は先にふれた江幡春庵の弟である。弘化二年十九歳で脱藩して江戸に上り安積良斎の塾に学び、ついで東条一堂の門に入り頭角を顕した。弘化四年には京都に学び、また大和五條の森田節斎に入門した。嘉永元年には広島坂井虎山の門に学び二十二歳で塾長に上げられた。兄春庵が嘉永二年獄中に憤死するやその悲報を大坂で聞いた彼は策謀者田鎖左膳が江戸へ上る途中で誅殺せんと図り、吉田松陰の同情をも受けて機会をうかがった。しかしこの計画を

(11) 『続日本思想史研究』岩波書店 昭和14所収「鶴峯戊申の開国思想」。

(12) 『八角杏斎の研究』私家版。『岩手史学研究 73, 74』。『アルテス・リベラレス 52』所収「松前箱館ニ而異国人一条之事」等。

果たさない内に嘉永六年の大百姓一揆の勃発によって藩主利済は幕命により謹慎側近の左膳も失脚した。五郎はその後も浪人生活を安政五年まで続ける事となる。(彼が藩主利剛から藩校明義堂の教授として迎えられるのは安政六年である。なお、五郎の養子が後の東洋学者那珂通世博士である。)この浪人期間中の安政二年六月に石巻で涌谷藩主伊達安芸邦隆に異国船来航に伴う藩政意見書を提出した史料⁽¹³⁾がある。南部盛岡藩の漢学者が外圧に対していかなる意見をもっていたのかを知る資となろう。冒頭で次のように述べる。

異国船渡来仕候と石巻津方より郡へ相議し郡方え問議し、其後飛脚を命じ飛脚己の家へ帰り酒飯など認め其後出候まま、かれ是三時も四時も相後れ…御家へ参り候ても御家老御小姓頭などかれ是と相議し、其後三武頭の足軽ともを遠在より呼集候て兵具庫前にて銘々鉄砲など被渡候間四時五時も相懸候まま通計一日一夜位ひまとり候

かかる家臣団の弛緩した状況では緊急時の役に立たない事を指摘する。これに対して日和山他の各地に烽火台を置き、志しのある番兵を配置して緊急通信体勢を整える必要を述べ、また異国人が上陸した際に急速に対応出来るように坂道の各所に「鉄砲小屋」を設置することを提言する。

次に、沿岸巡検の必要を説く。

宮古、寒風沢、田代などは彼ら(異国船)が薪水用とも相成候はば是又大事と存候ままかねて其地理もよくよく三左衛門新助などに見させ置かれ度候さりながら志しなきものを同行被遊仰付ては互いに遠慮いたし思存分巡検なり難き様子、拙者も目撃仕候事も有此れま是亦御心付かれ是場所は台場よろしき処彼処はいかほど人数つめれるべきなどかねて能々為居見立置可被遊候事

文中の三左衛門というのは、涌谷の砲術家鈴木久八郎の次男で兄が江戸遊学中に客死したので、同族の鈴木讓之助とともに嘉永五年九月江戸に遊学し佐野万邦松山大学に從学後田原藩天野遠道から西洋砲術を学んだ人物である。また、新助とは十文字信助のことで後に秀雄といひ戊申戦争で活躍した。新助の子が後の洋学者十文字新介、大元である。五郎は既にこれら当時の涌谷の新進気鋭の西洋学に通ずる藩士たちと昵懇の間柄にあったし、これらの志しある若手を登用するようにと進言しているのである。興味深いのは巡検に際して、「志しなきもの」を同行したならば却って弊害が生じるであろうと述べている点である。

言うまでもなくここで「志しあるもの」とは西洋砲術をはじめとした新しい兵学を志向するものの事であり、且つ藩国への忠誠心の強きものの意である。新旧の対立が藩内に生じる事を危惧しているのである。五郎は次のようにも述べている。

此度の異船渡来は御家の御為并に御本藩の御為国家の為に賀すべきの基には御座候へども、俗吏の虜情を不知ものは又々なまけ言葉に候間能御心用いられ度事かと奉存候其上福沢始め有志の少年とも迄色々心配仕候を見、俗吏ともは事を好ず様に悪み議り候かねも承知仕候、若し此ままにて御家中越前には水戸の如くに両方に相分れ党を結候様に相成も難斗、もし二つに分れ候はば前申上候通君子多からず小人とも沢山故終には有志のものは御いやながらも御放逐などと申す事とも相成かと慨嘆仕候

あくまで五郎はここでは涌谷藩主に対して水戸のように藩内が二つの党に分かれなことを戒告しているのであるが、実は彼の兄春庵が南部盛岡藩においての改革的進歩派に属し頑迷な守旧派によって弾圧され、彼自身も藩から疎外されて浪々の身となっている事を慨嘆してもい

(13) 盛岡市中央公民館所蔵(写)。

(14) 『地域社会研究7, 8輯』東北大学地域社会研究会 昭和31「江幡五郎と涌谷」。

るように考えられるのである。

以上のような改革意見を提出したが、五郎自身は自ら「軍師と人となりは拙者存じ申さず」という如く兵学者ではなかった。しかし、佐々木敏雄氏が指摘⁽¹⁴⁾するように修行中の有志、鈴木讓之助や佐々木龍治に須藤良治の野戦砲鑄造の図面を送ったりして助力していたのである。

四、八角杏齋「亜墨利加船渡来ニ付御心附被仰上候一条」

異国船来航に関して涌谷という小藩に対して、しかも石巻という北上川の船運拠点を中心にした五郎の意見書について述べたが、当時南部盛岡藩の内部意見はいかなるものであったろうか。

南部盛岡藩医八角宗律・杏齋の嘉永六年九月の「大守様御心付海防向之義」という史料⁽¹⁵⁾がある。これはペリーの第一回の来航・開国要求文書に対して時の幕閣阿部正弘がその訳文を諸大名以下幕府有司に示して意見を求めたのに答えた南部盛岡藩の意見の写しである。奥医師で西洋医学者であり、藩内で進歩的な思想の持ち主であった八角宗律については別に拙論文があるので省くが、当時藩内でいかなる対外思想が主流を占めていたかを知る資料であろう。というのは後に八角宗律たちは新しい改革意見の提案者として改めて登場してくるからである。

冒頭に「今度北アメリカ人願出之趣実ニ不敬之義ニ而且ツ交易之義ハ唐阿蘭陀之外決而不相成」と述べ断固たる拒否論を展開する。拒否はするが、「今般差上候書簡ニモ有之通り来春必軍船数艘渡来モ可致」状況にあるので「海岸御警衛之義嚴重」なるべきを説く。それには一つには海岸に「大砲数々御製造」の上設置して「浦賀（と安房との間）之船行自由ナラザル御造立」が必要であるとする。二には房相兩岸に「水上之仕懸大木之筏ヲ以テ」封鎖する「連環之仕法」が考えられるとする。しかしこの筏だけでは不備なので「筏下ニ水雷火之秘術ヲ施シ置キ夷船之着到ヲ相待チ彼船此辺へ近寄り候ハバ速ニ激発雷動為仕候」と「水雷火」の使用を説く。更に「私儀年来諸流兼学致し候得共諸流ニ火攻之術無之ニ付別而森重流近年相用ヒ砲術及火攻術共奥義相極候儀ニ候得者何卒森重流火攻術浦賀之御用被仰付候ハバ可然」と森重流火攻術の採用を願っている。

「森重流」とは寛政年間周防の森重都由が創始した水軍砲術の流派であり、数艘の火薬船や火筏をもって敵を焼打つ仕掛けを特徴とした。前回の終わりで佐藤信淵の「自走火船」について述べたが、これにも連環する発想ではあるが蒸気軍艦への対応策としては技術的に薄弱なものであった。

技術的に発想が薄弱であっただけでなくもっと問題であるのは、南部藩は既に北辺の外圧を直接に受けていた訳であるし、下北半島突端大間から箱館へ海上ルートによって多くの藩兵が蝦夷地警備の送られてもいたのである。当然南の浦賀水道の警備と共に北方の津軽海峡の警備問題があったはずである。しかるに目は江戸御城御要害に固定している。ちなみにペリー再来航の後の日米和親条約では北の箱館の開港が現実の問題となってくるのである。

五、安政三年奥筋巡行

安政三年（1856）四月二十四日南部盛岡藩主利剛は盛岡を出発して奥筋（野辺地，下北方面）の巡検を行う。この巡検は箱館へのペリー入港後とは言え重要な意味をもっていた。あたかも五郎が涌谷藩主に藩内の巡検を要請したものの南部藩における大規模な実施であった。この奥巡の記録は巡検に同行した八角宗律、漆戸茂樹、野々村真澄、米田貞機などによって残されて

(15) 『八角宗律奥筋巡見随行記 付杏齋秘録』盛岡てがみ館 平成2 49頁以下。

いて巡検の実態がわかるのであり、既に拙論でも一部分析したところである。

ここでは二つの点から考察しておく。一つは北方の警備問題であり、二つには既に始まっていた新渡戸傳、十次郎(稻造の父)三本木原開拓問題である。巡検日程からいえば三本木原開拓が先である。新渡戸傳が三本木原の開拓に着手したのは安政二年八月である。利剛の巡検の前年の夏である。漆戸茂樹の記録『若葉の幣』¹⁶⁾によると次のようである。

(四月)二十九日朝曇りたれときのふ見残し給ひし大久保某か武のわざ見給ふとて武の業ならず庭にまからせ給ふ其事はててきのふののへにて大砲というをうたせ見給はんとしてそこへ御馬よせられしかとも雨をやみなければそれもやみやがて藤島の駅より相坂川を御船にめして渡り給ふまも御侍に侍りしか雨いよいよふりてひたぬれにぬれるも中々おかし三本木の宿にてしはし休らい給ふこのわたり大かた広野にて見所もなし。爰に新渡戸傳という人…新田といふを開かんとてはるけき川の流より穴堰といふを穿ち其川水を引きて田にせんとのこと聞こしめし其堰見んと給ひ給ふこはさすがに此広野をし開かんとてたてなれば行すへたのもしくおもほし給ふによれる御心持みなりそはまことに浅からぬ御事とはうけ引まつれと雨おやみなく道走あしき遠かたなればそこに行廻らせ給ひては日も暮なん(次の七戸御城では数百人の武士が待っている)君本ゐなき御けしきながら七戸さしてたたせ給ふ

とある。悪天候の為に穴堰の視察を断念したのである。この断念は利剛にとって心残りでもあったろうが、この時傳の子十次郎は御勘定奉行として巡検に同行していたので久方ぶりの再会を期待したであろう十次郎の心残りも大きかったであろう。十次郎は役職上は勘定奉行であるが、この巡検では海岸防備設営の土木技術者として重要な役を行っている。例えば野辺地では、五月四日…みなるといふに帰らせ給ひて台場といふを見給柝内とはからひまして新渡戸十次郎に命せてあらたに此台場厳かに築けと縄張らせなどし給ふ

とあり、また大畑では、

十日(大畑湊の大砲の台を視察し)唯々世人の眼にふるる飾りのみならんはおもはしからずされは散々あまた所の台場を必と備ふへき大事の所にまとめもて事おこそかに其の手の配りも大砲の数をも火の業せるものふもそれぞれにかたく調はしてこそよからめ何事も花より実こそあらまほしけれと覚したてられこたひは御みつから柝内逢吉にはからいまして改め正し給ふにこそ夫はしも厳かにおひたたく築かせらるなればすみやかにいとなみて年を月に月を日にといそき物せらるその事はまた新渡戸十次郎に仰事ありていそかせ給ふ

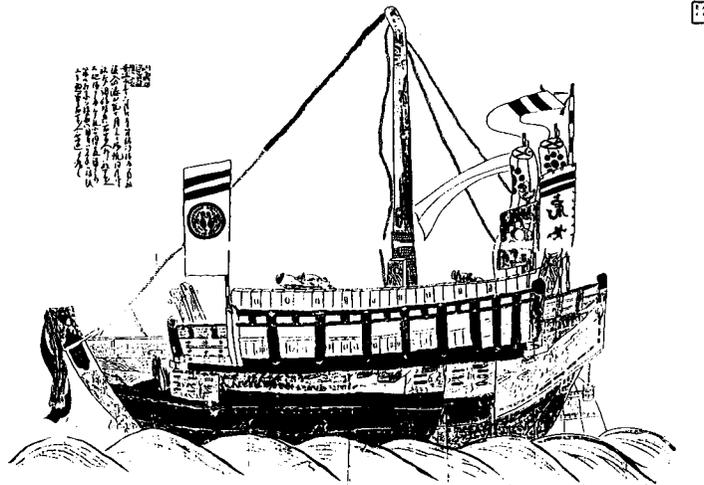
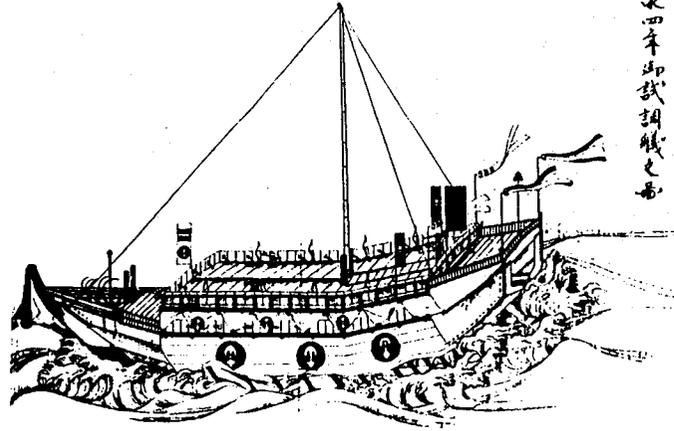
とある。柝内逢吉とは柝内与兵衛の事で、この時は「御側御用人」として同行者の筆頭であったが、後に海防御用懸となった海防の専門家であった。利剛は柝内や新渡戸十次郎を用いて、現実的防備体勢への転換を図ったのである。現実的防備体制への転換という点から考えると、南部藩の軍船備の問題もあった。

というのは、利剛はこの巡検中「軍船虎丸」を視察しているからである。従来この巡検中の軍船の記事については『旧盛岡藩文武教育概要学校沿革』の次の記事が参照されてきた¹⁷⁾

安政三年国中巡視文武を直見し鉾山(鹿角郡花輪村尾去沢銅山白根金山)に臨み山背点見鉾山の学事を聴聞して海岸に至り七浦を巡察台場を増し大砲実丸を各砲台に試み田名部大間沖に於て大小砲を見分(船は嘉瑞丸と云ふ当時蝦夷地警衛に付軍艦を造り年々出兵交代用船の内なり)数月にして帰城…

(16) 岩手県立図書館所蔵本。

(17) 例えば、大島信蔵編『大島高任行實』316頁。



しかし、漆戸や八角の記録によると事実は異なっていた。八角は五月十三日佐井の記事として「御昼後虎丸へ御乗船被遊候所、御船氣被為在御延引、薄荷差上之」と記し、漆戸は「爰(に)いにし年虎丸と名付し軍船此はしもむかし公より給はりたる宮古丸虎丸の二ふねの名なるかもとの虎丸ははやめたれば再び造り給はんとて戌のとしといふに江戸の浦里にて厳かに物せ給ひしを此北浦へ漕ぎ下らしめ防の用とし給ひぬるをこたひ君に見まいらせんの催にて此佐井浦へ漕付させ侍りし」と記している。戌の年とは嘉永三年に当たるが、「安政二年六月大島高任新造」と題字される岩手県立図書館蔵の船図(下図)⁽¹⁸⁾には「大砲備十匁三十挺小筒四十挺鏝十五筋」という装備を記している。虎丸は嘉永以後更に改良し新造したのであろうかとも考えられるが、

(18) 岩手県立図書館所蔵。この船図と異なる「嘉永四年御試調艦之圖」(上図)という資料があるし、新渡戸十次郎の建造という記事を伴った図もある。

(19) 『岩手史叢 第五巻 内史略(5)』岩手県文化財愛護協会 昭和50。

船体は和船五百石程度⁽¹⁹⁾で重い砲と人員を搭載していたので必ずしも行動は敏速ではなく、波によるローリングも激しかったようで実戦用としては不十分であったと考えられる。この時も乗船後直ぐに利剛が船酔いする様であった。

外洋での交戦的な軍船の建造はこれ以後になる。なお、この巡検では花輪方面の鉾山視察は断念している。

いずれにしても利剛には山積する新たな課題を抱えた巡検ではあった。